

覚醒レベルの低い重度・重複障害児の学習を促進する条件

○菅智津子 樋口和彦 三島修治
 (島根県立松江清心養護学校) (島根大学) (島根大学大学院教育学研究科)
 KEY WORDS: 重度・重複障害児 覚醒レベル 学習 促進条件

1. 目的

重度・重複障害児の学習について、松田(2002)は、子どもの変容の過程からカリキュラムや学習形態の妥当性を検討することや、経過のエピソードから指導に際して設定した視点の有用性を検討することの重要性を述べている。池田(2016)は、重度・重複障害児を対象とした事例研究の課題として、研究のための特定の条件が設定され、学校現場での自然な流れが考慮されていない点をあげている。

本研究の対象生徒は、てんかん発作があり、覚醒レベルが低く、学習中であっても眠ってしまうことが多かった。重度・重複障害児の事例研究を見てみると、覚醒レベルが低いことについて、実態として表記されることは多いが、覚醒レベルが低いことに対する教育的な支援について検討したものはほとんど見られない。

本研究では、覚醒レベルの低い重度・重複障害児に対し、在籍する特別支援学校の教育過程で指導を行い、事例を検討する。そして、覚醒レベルを上げて学習を促進する条件を明らかにしていくことを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

生徒A: 特別支援学校(肢体不自由) 中学部1年生(以下、Aとする)。脳性まひを原因とし、運動障害と知的障害を併せ有する。小学部低学年時では、座位保持椅子を使用し、手を伸ばして好きな物に触ったり背這いで移動したりする等の様子が見られていたが、高学年になると、てんかん発作が頻発し、服薬の影響もあってか、学習中であっても覚醒レベルが下がり、眠ってしまうことが多くなった。中学部入学時は、教師と1対1のかかわりで身体を動かすような活動では覚醒して取り組むことができたが、学級(5名)や学部(16名)等の集団の活動では眠ってしまう状況であった。一方、光る物や色のはっきりした物を提示すると目を見開いたり、紐等を手に物を持たせると引っ張ったりする様子が見られたりした。

(2) 期間 20XX年4月～20XX年+1年3月

(3) 手続き Aが覚醒して学習に取り組むために、①週時程、学習時程、②学習集団の規模、③教材教具、④指導者のかかわり方、姿勢について改善を加えながら指導を行う。

(4) 観察・記録及び分析の方法

- ①毎日の指導終了後に、1日の流れに沿って記録をする。
- ②観察期間終了後、①の記録を、(3)手続きで示した4点とAの様子に分けて整理し、表にする。
- ③②で整理した表をもとに、Aの変容と学習を促進する条件について検討する。

3. 結果

学習の条件を変更した時期を区切りとして、4期に分け、具体的な支援、Aの様子について記述する。

【ベースライン期(20XX年4月～5月)】

・学級の4名の集団での集団学習と個別学習を設定し、指導にあたった。午前中に設定した教師と1対1で身体にかかわる学習では、覚醒して取り組めることが多かったが、「おはなし」の集団学習では、5回実施した中で4回眠ってしまうように、学級の4名で同じ流れで学習する場面では、眠ってしまうことが多かった。

【Ⅱ期(20XX年6月～7月)】

・Aが、眠ることが多かった「おはなし」の学習を教師と1対1で行った。また、個別学習では、ウインドチャイムや引っ張りオルゴール等、Aの得意な動きでかかわれる教材を使用し、Aが楽に過ごせる仰臥位で取り組んだ。その結果、Aは、手や足を動かしたり、目を大きく開けたりしていた。

【Ⅲ期(20XX年9月～20XX年+1年10月)】

・「チャレンジタイム」という名称の学習を週1回午後1時30分から2時30分までの1時間設定した。Aが覚醒して学習に取り組むことを最優先とし、覚醒状態が高いときに活動を始め、活動量や内容、姿勢をAの様子に応じて調整した。また、学級全員で行う素材にかかわる学習(ドキドキタイム)では、全員であいさつをしたり歌ったりしてから学習を始めるという流れを止め、それぞれの生徒のタイミングで活動を始めて展開することとした。その結果、Aは、眠ることなく教材にかかわることが増加した。

・教材に、身体の緊張を利用した動きでかかわることを認めると、教材に気づいて目を開けたり、身体に力を入れて手を動かそうとしたりしていた。

【Ⅳ期(20XX年11月～同年3月)】

・Aは、1日を通して眠ってしまうことが少なくなった。他の生徒と場を共有し同じ生活時程で学習を展開したり、適切な動きでの教材へのかかわり方を身体的な援助を通して伝えたりすることも行った。

4. 考察

Aが覚醒して学習に取り組むための条件について、手続きであげた4点について検討する。

①週時程、学習時程

・「チャレンジタイム」を長い授業時間設定にし、Aの覚醒状態がよいときに学習を始められるようにしたため、覚醒のタイミングを逃さずに活動することができるようになった。その後、覚醒レベルが安定し、他生徒と同じ学習時程で学習できるようになった。

②学習集団の規模

・覚醒レベルの低い状態では、教員との1対1での学習を設定し、生徒の動きに即時的、随伴的に応じることが有効であった。覚醒レベルが安定してくると、場を共有し他の生徒と同じ生活時程で学習したりすることも可能になった。

③教材教具

・Aの得意な動きである引っ張る動きで操作ができ、応答性の高い教材では、Aの覚醒が覚醒して取り組めた。オルゴール等聴覚に入力する教材よりも蛍光色のボール等視覚に入力する教材の方が覚醒を促すことに有効であった。

④指導者のかかわり方、姿勢

・指導開始当初は、Aの主體的な動きを優先し、覚醒が安定してから適切な動き方を教えるという指導のステップが有効であった。また、Aの得意な臥位の姿勢での学習も有効であったと考える。

引用文献:

- 1) 池田史志(2015) 重度・重複障害児を対象とした関わりに関する研究動向と課題. 広島大学大学院教育研究紀要, 1, 64, 29-38.
- 2) 松田直(2002) 重度・重複障害児に関する教育実践研究の現状と課題. 特殊教育研究, 40(3), 341-347. 他

(KAN Chizuko HIGUCHI Kazuhiko MISHIMA Shuji)